京都支部京都支部ハイブリッド公開講演会を終えて

「アートを楽しむ―印象派から現代美術まで」
（2023 年 6 月 17 日）
武蔵野美術大学芸術文化学科教授
杉浦幸子（1990哲）氏

鴨川に面した「KKR 京都くに荘」を会場に、28 名（支部会員 19、他支部会員 2、非桜蔭会員 7）、Zoom で 30 名（40 名の申し込み）の参加がありました。

アート作品の楽しみ方として講師が提案されたのは、次のような三段階の方法です。

① 作品との対話（観象。作品そのものから五感で感じ取る。知識はなくていい。）
② 自分との対話（自分が思ったこと・感じたことについて、なぜそうなったか理由を考える。）
③ 他者との会話（自分の思ったこと・感じたことを言語化、共有する。他者の思ったことや感じたことも聞く。）

この中で講師が特に大切にしておられるのが、①の作品とすなおに向き合って対話する「観象」です。講師は、赤ちゃんや幼児の頃から本物のアートを見せたり触らせたりしてその体験をさせる、という活動にも力を入れておられます。小さい頃に覚えたその向き合い方で、子どもたちは大人になってもアートに親しんでいくことでしょう。

上の①～③の方法を、参加者が実際の作品を鑑賞して体験してみることになります。講師が会場に持参された、菅かおるさんという女性作家の「環の中のぽんぽん菊」という美しい日本画作品を、会場では間近にいろんな方向から見せてもらい、Zoom 参加者は画面で見ます。参加者が 3、4 人ずつのグループに分けられて、感想や疑問点を語り合います。他のグループの発表も聞いていると、絵の見え方がさらに深まっていきます。

そこへサプライズで、作者の菅さんが、東京の東武百貨店で開催中の個展会場から Zoom に入って来られました。そちらに展示されている違う作風の作品が見られたり、かなり突っ込んだ数々の質問にまっすぐに答えてくださるお人柄が伝わってきたりするにつれ、共感が盛り上がってきます。

作品を制作するときの姿勢を問われた時、「自分の中のピュアなものを濾過して作品にする」と答えられたのが、とても印象に残りました。講師がもう一つ持参されたのは、絵具とマスキングテープを勢いよく使った現代アート作品でした。作者の中屋敷智生さんが「尽人事听天命」（中国語で「人事を尽して天命を待つ」の意）と名づけた時のエピソ

ードを語っていただき、作品との距離が縮まるのを覚えました。
　会場・Zoom を問わず、参加者を巻き込んだ楽しい企画となり、和気あいあいとした空気の中で終わりました。心をこめて準備してくださった杉浦先生に感謝申し上げます。また、講師と京都支部のスタッフの協力で、手持ちカメラによる接写映像も織り交ぜながら、画面共有・ブレークアウトルームなど、ICT を駆使した講演会となりました。

　アンケートに回答した方全員が、「アートを是非鑑賞したい」または「できれば鑑賞したい」と答えておられ、講師の思いは通じたことと思います。参加者から寄せられた感想の一部を紹介いたします。

・アート鑑賞から少し遠のいていたが、改めて「観象」したいと思いました。
・実はつい先日私もはじめて小学 2 年の男の子を連れて美術館に行き、注意を受けるなど、難しさを感じました。今日の講演を聞いて、絵を買って家でじっくり見たり日常にアートを取り入れたりというやり方もあるのだなと気付きました。
・目の見えない白鳥さんとアートを見に行く、という内容の本など読んでおりましたので、見る以外のことを楽しむ美術のお話は興味深かったです。AI を仕事で扱っておりますので、デジタルアートとの融合も気になりますが、VR やメタバースの空間全てで感じ取る絵画が今後は発展していくのかしら、と思いながら講演を伺っておりました。
・ネット参加は視聴のみだと思っていたので、後半は新鮮に楽しめました。赤ちゃんがアートを観て反応しているビデオ映像も興味深かったです。
・日本ではまだまだ知識としての鑑賞、答え合わせをするかのように美術館へ足を運ぶ。 という事が非常に多く、静かに黙って鑑賞するべきという雰囲気が美術館にあふれています。もっと正解を求めないような文化を作ることはできないか。より生きやすく、大人も子供ももっと創造的に豊かな人生を送れるといいと思います。
・普段からギャラリーに行ったりしますし、自分で描くこともありますが、やはり独り言を言いながら見たり描いたりしているので、それでもいいのかなと思いました。また、他の人との会話も楽しそうなので、今度は複数で行きたいと思います。

以上